

# うき草

## 映画文学人生論

二葉亭四迷 (1864-1909)

原作：ツルゲーネフ (1818-1883)

二葉亭四迷訳『うき草』(1908)「金尾文淵堂」

中村融訳『ルーヂン』(1961)「岩波文庫」

工藤誠一郎訳『ルーヂン』(1978)「集英社」

僕はどうも浮草の性質だね。一所にいつまでも落着いてゐられないのだ。

日本の近代小説は二葉亭四迷『浮雲』をはじめとして余計者を主人公とした作品が主流らしい。『浮雲』の内海文三は勤め先をクビになり、下宿作の従姉妹お勢にも冷たくあしらわれて悩む。

文三のようなダメ男はツルゲーネフ『うき草』のルーヂンやゴンチャレンコの『オブローモフ』がモデルになっており、日本では夏目漱石『それから』の長井代助や太宰治『人間失格』の大庭葉蔵などを後続者としている。性格的には私も似たようなタイプではないかと思う。

そこで、ツルゲーネフ原作、二葉亭四迷訳『うき草』を読んでみた。主人公は、年頃三十五六の背の高い、少し猫背で、縮毛の、色の浅黒い男——これがルーヂンである。

彼は哲学に関心の深い男爵の紹介により、県下でも一二を争う程の金満家のダーリヤ、ミハイロウナ、ラスンスカヤの邸宅を訪れる。ダーリヤは名の聞こえた人で、モスクワでは誰一人知らぬ者がいない。

その客間には何人かの客が集まり、ロシアの田舎の上流社会らしい知的な会話をしている。

「併し、真理は——真理とは如何（どん）なものです？ 何処に遺つてゐます？」と、ピガーソフという変わり者の客がルーヂンに聞いた。



# うき草

映画文学人生論

「また議論が後戻りをしますよ」とダーリヤが口を挿（はさ）む。

「後戻りをしたって宜しい。ご存知なら承りたい、何処に遺（お）ちています。カントが真理とはかういふものだと言へば、ヘーゲルは否然うではない。こんなもんだと言ふ。」

「ヘーゲルがどんなものと云ったか、御存知ですか」とルーチンが何気なく云ふと、ピガーソフや憤然（やつき）となつて、

「真理は何様（どんな）もんだか、私にや解せんと云ふんです。私の考では、真理と云ふものは全然ないものだ。成程、語（ことば）はある。けれども実体はないものだ。」

ルーチンはそんなピガーソフを論破して、女主人ダーリヤの信頼され、ダーリヤの娘ナターリヤの心をつかむ。そして、ナターリヤと結婚しようとしたが、女主人ナターリヤに拒否された。かといつて、ナターリヤと駆落ちするだけの勇氣もない。すごすごと身をくramsすしかなかった。

ルーチンは、すぐれた知性を持っていて、社交の世界では人気者になるが、いざという時の行動力がなく、失敗をくりかえす。

「俺はどうも浮草の性質だね。一所（ひとつところ）にいつまでも落着いておられないのだ」と友人に述懐したように、彼自身もインテリの弱さを自覚していた。

浮草につて流るゝ蛙かな

正岡子規